

途中の建築

－ 解体を止めた先の途中式 －



家は、完成された固定物ではなく、日々の営みや交流によって刻々と変化する「途中の建築」だ。新たな命がもたらされることで価値は足し算され、誰かが巣立つことで一部が引き算され、空間が仕切られることでその役割が再構成され、交流が生まれることで新たなつながりが掛け算される。しかし、家が空き家となると、その計算は突如として止まってしまう。完全な解体に至れば、これまで積み重ねられてきた営みはすべてリセットされ、過去は消え去る。一方、何も手を加えなければ、未完の式として家は町に取り残され、成長を続けることはない。だからこそ、解体を途中で止め、これまでの足跡を活かしながら新たな価値を加えることが求められる。家は再び変化を始め、その動きはやがて町全体へと広がり、新たな風景を紡いでいこう。家はまさに「途中式」のような存在であり、その式が続く限り、町の物語もまた尽きることはない。



解体は一見マイナスな行為に思えるが、人間中心の視点を動植物の世界へ移すと、むしろプラスの要素となり得る。例えば、取り壊された建物の跡地が自然再生や生態系の多様性を育む場となり、新たな命が芽吹く土壌へと変わる可能性がある。



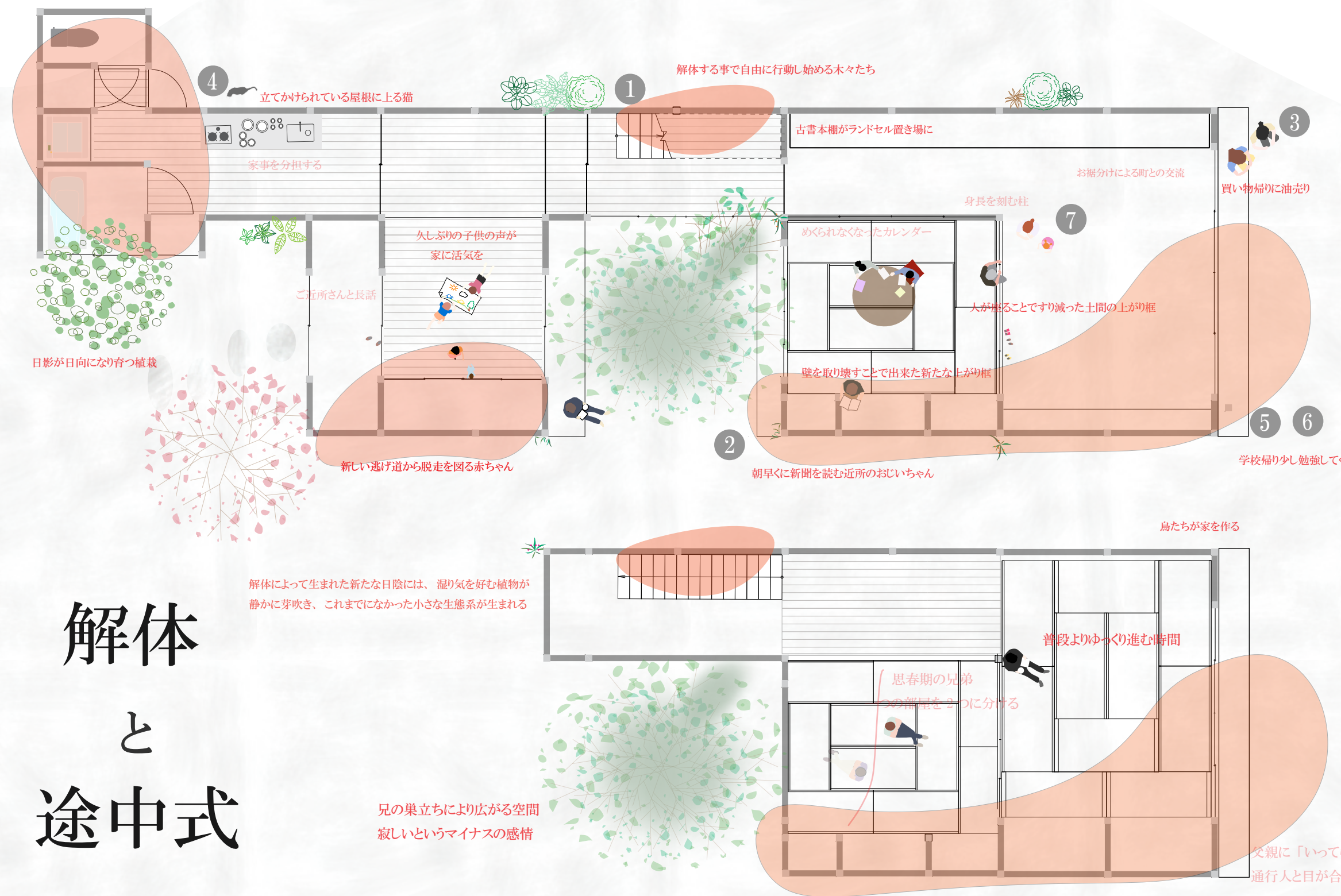
壁を取り壊すことで、家の動線に新たな選択肢が生まれ、限られた通路が多様なルートに変化する。これにより、人々は新たな空間利用法や生活スタイルを発見できるようになる。



扉が外れ、家と町がゆるやかに繋がることで、思いがけない交流の場が生まれる。学校帰りの子どもが宿題を見てもらい、通りすがりの大人が話し相手になる。そんな時間が、町と家をつなぐ風景として溶け合わせていく。



解体が光を招き、影を生み、新たな色彩を刻む



町に開けた 解体後



風景と化した 解体前

解体と途中式

01 未完の式としての家

今回のテーマである『四則演算』は、日常の何気ない営みの中に自然に息づいており、その一つ一つの事象が町や家を形作る大切な材料となる。新たな家族がもたらす足し算は、町に活力と温もりを加え、子供の巣立ちは引き算でありながら空間に新たな可能性を広げる足し算でもある。余った料理を分かち合う割り算は、互いを結びつける掛け算へと変わる。こうして、単なる計算式を超えた四則演算が、日々の小さな行為を町や家という壮大な物語へと紡いでいく原動力となる。

02 途絶え消えゆく途中式

$$\dots\dots + \text{人} - \text{人} \div \text{人} \times \text{犬} + \text{植物} \times \text{人} \div \text{人}$$

人が去り、窓が閉ざされると、かつて「町」という生きた式を奏でていた空間は静止し、動きを失った風景の一部となった空き家となる。家という「途中式」が止まり、町という壮大な計算の中に取り残されやがて解体されることで、その式はゼロへと還る。積み重ねられた営みが消えてしまうのは、あまりにも寂しい。

03 解体を途中で止める選択

解体を途中で止めるという選択は、過去の記憶を残しながら新たな価値を吹き込む行為だ。この手法は今回の建物だけでなく、どんな空き家にも応用できる。壁や柱を開放することで想像もしなかった使い方が生まれ、失われるはずだった空間が町の新たな風景へと息を吹き返す。まさに、途中式を動かし始める力がそこにある。



かつて土間で交流していた場所が、再び地域の交流の場として息を吹き返す